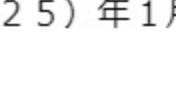


## 洋13-6

### 「もうひとりのシェイクスピア」



2013(平成25)年1月12日鑑賞<TOHOシネマズ梅田>

監督：ローランド・エメリッヒ

オックスフォード伯エドワード・ド・ヴィア／リス・エヴァンス

若き日のオックスフォード伯エドワード・ド・ヴィア／ジェイミー・キャンベル・パウラー

エリザベス1世／ヴァネッサ・レッドグレイヴ

若き日のエリザベス1世／ジョエリー・リチャードソン

ウィリアム・セシル（エリザベス1世の宰相）／デヴィッド・シューリス

サウサンプトン伯ヘンリー・リズリー（エドワードとエリザベス1世の隠し子）／ゼイヴィア・サミュエル

エセックス伯ロバート・デヴルー／セバスチャン・リード

ベン・ジョンソン（劇作家）／セバスチャン・アルメストロ

ウィリアム・シェイクスピア（役者、劇作家）／レイフ・スポート

ロバート・セシル（ソールズベリー伯、ウィリアム・セシルの息子）／エドワード・ホッグ

語り／デレク・ジャコビ

2011年・アメリカ映画・129分

配給／ファントム・フィルム

#### <文学史上最大の謎、「シェイクスピア別人説」とは?>

1999年5月4日に観た『恋におちたシェイクスピア』（99年）は劇中劇をふんだんにとり入れた最高に魅力的な映画だったが、『もうひとりのシェイクスピア』という邦題の本作は文学史上最大の謎とされている「シェイクスピア別人説」にドイツ人監督ローランド・エメリッヒが真正面から向き合ったもの。

「シェイクスピア別人説」とは、『ロミオとジュリエット』や『ハムレット』などの37の戯曲と154篇のソネットを残したイギリス最大の劇作家ウィリアム・シェイクスピアはイングランドの田舎町ストラトフォード・アポン・エイヴォン出身でひげ面の私たちおなじみの人物だが、彼はこれらの作品の本当の作者ではなく実は二セモノで、ホンモノは別にいるという説だ。18世紀に始まったこの「論争」については、さまざまな論拠をあげて多くの著名人が「シェイクスピア別人説」に立っているらしい。そして「シェイクスピア別人説」の中で現在最も有力とされているのが、第17代オックスフォード伯エドワード・ド・ヴィアが真の作者ではなかったか、というものらしい。この論争の解説はパンフレットに詳しく書かれているし、ネット上でも数多くの資料があるのでそれを参照してもらいたいが、ウィリアム・シェイクスピアについてそんな論争があったとは！

三国志の「劉備玄徳は女であった」という仮説に立ったスーパー歌舞伎『新・三国志I』（01年）（『シネマーム1』96頁参照）は面白かったが、それは「逆転の発想」の奇抜さでぐいぐいストーリーをつくっていただけ。それに対して「シェイクスピア別人説」は、16世紀後半に活動したシェイクスピアの自筆の原稿が400年もの間何ひとつとして見つかっていないことや、イングランドの田舎町ストラトフォード・アポン・エイヴォンに生まれ育ち、高等教育を受けた形跡もない彼が、なぜあれほど深い教養を持ち、宮廷の事情にも通じていたのか、等々の疑問のうえに200年以上続けられてきた「学術論争」だから、本作は単なるアイデア映画ではない。「シェイクスピア別人説」に立った場合、それならホントのシェイクスピアは一体誰だったのかという謎解きミステリーの映画にすることもできるが、本作は本当のシェイクスピアは第17代オックスフォード伯エドワード・ド・ヴィアだったという前提に立ったうえで、「もう一人のシェイクスピア」はなぜ自分がホントのシェイクスピアだと名乗り出なかったのかという歴史上のミステリーに光をあてる構成となっている。ええ！そんな歴史ミステリーがあったの！そんな映画ミステリーを知らなかつたなんて！

#### <複雑な登場人物の把握をしっかりと！>

エリザベス1世を主人公とした映画は、ケイト・ブランシェットがエリザベス1世を演じた『エリザベス』（99年）や『エリザベス：ゴールデン・エイジ』（07年）（『シネマーム18』174頁参照）等が有名。牛耳、独身を通してエリザベス1世は「処女王」とも呼ばれたが、他方で多くの愛人がいたとか、隠し子がいたとかの説もあるそうだ。

本作は現在のエリザベス1世をヴァネッサ・レッドグレイヴが、若き日のエリザベス1世をジョエリー・リチャードソンが演じ、また現在のオックスフォード伯エドワードをリス・エヴァンスが、若き日のエドワードをジェイミー・キャンベル・パウラーが演じている。また、エリザベス1世の即位から40年間にわたって忠実な臣下として支えてきた、宰相のウィリアム・セシル（デヴィッド・シューリス）と、その息子ロバート・セシル（エドワード・ホッグ）の両名が登場するし、若き日のエドワードと若き日のエリザベス1世との間に生まれた男の子ヘンリー・リズリーも、今はすっかり大人になったサウサンプトン伯ヘンリー・リズリー（ゼイヴィア・サミュエル）として登場する。このヘンリー・リズリーは、これもエリザベス1世の隠し子と噂される盟友のエセックス伯ロバート・デヴルー（セバスチャン・リード）と組んで、王位継承をめぐって、ウィリアム・セシル、ロバート・セシル親子と対立するから、その権力闘争のサマも見ものとなる。他方、映画冒頭「芝居は悪魔の産物」と決めつけ、芝居に扇動された民衆が政治に影響を与える事を恐れるセシルが弾圧するのが、ロンドンの芝居小屋で大きな人気を呼んでいる劇作家ベン・ジョンソン（セバスチャン・アルメストロ）。逮捕されたベン・ジョンソンに対してセシルは原作をすべて提出するよう迫ったが、それに対するベン・ジョンソンの対応は？

このように本作はセシルからベン・ジョンソンが迫害を受けている今の時代と、若き日のエリザベス1世と若き日のエドワードの恋模様や、若き日のエドワードがエリザベス1世と別れ、セシルの娘との結婚を余儀なくされる約30年前のストーリーを平行して描いていくから、本作の理解には2世代にわたる登場人物をはじめとする多くの登場人物をしっかりと把握する必要がある。エリザベス1世時代特有の華やかな王朝絵巻と芝居小屋で次々に発表されるシェイクスピア劇のすばらしさに酔いしれるロンドン市民の熱狂ぶりを楽しみつつ、本作が描く壮大な「歴史秘話」の真髄に迫りたい。

#### <ストーリーの軸その1－2人の「密約」は?>

第1回アカデミー賞作品賞を受賞した『恋におちたシェイクスピア』は、同主演女優賞を受賞したグウィネス・パルトロー扮する上流階級の娘ヴァイオラが舞台に立つために男装したところから生まれる、若き日のシェイクスピアとの恋を描いた名作だった。したがって、当然シェイクスピアはヴァイオラと並ぶ主役だった。しかし、本作では「もうひとりのシェイクスピア」たるエドワードが主役になるうえ、エドワードがセシルに捕らえられた劇作家のベン・ジョンソンに自分の作品をベン・ジョンソンの名前で上演するよう命じたところから、エドワードとベン・ジョンソンとの「密約」がストーリーの軸として展開していく。この2人の「密約」どおりに、エドワードの原作をベン・ジョンソンがしっかりと自分の作品として上演していれば、ウィリアム・シェイクスピアなどという名前は永遠に私たちの知らない存在だったはず。ところが、エドワードから受けとった戯曲『ヘンリー5世』の上演に興奮した観客が万雷の拍手の中で作者の登場を要求する中、「私が作者だ」と名乗り出たのがベン・ジョンソンではなく同じ劇作家のウィリアム・シェイクスピア（レイフ・スポート）だったから、これにはベン・ジョンソンもエドワードも嘆然！

ソ連では1985年に54歳で書記長となったミハイル・ゴルバチヨフが「改革派」としてペレストロイカとグラスノスチを推し進めたが、「守旧派」の反対も強く、1991年8月には「ロシア8月革命」（8・19クーデター）が発生した。大統領辞任を迫られたゴルバチヨフが別荘に軟禁され、反改革派が全権を掌握する中、「クーデターは違憲、国家非常事態委員会は非合法」との声明を発表して立ち上がったのが後にロシア大統領になったボリス・エリツィン。自ら戦車の上に立ち、旗を振り、ゼネラル・ストライキを呼びかけるエリツィンの映像が世界に放送されると、たちまち彼がゴルバチヨフの後継者として認知されることになった。

それと同じように、『ヘンリー5世』の上演で観客の心をワシづかみにしたウィリアム・シェイクスピアの人気も急ブレイク！そんな中、セシルの娘である妻からは戯曲を書くことを強く批判されながらも、エドワードは書くことへの欲求をおさえることができず、エドワードをして「登場人物たちの“声”が聞こえるのだ。書かなければ私は正氣を失う」とまで言わしめる状態に。したがって、エドワードが書き下ろす『ジュリアス・シーザー』『マクベス』『十二夜』『ロミオとジュリエット』等の戯曲をベン・ジョンソンが次々と上演していく中、ウィリアム・シェイクスピアの人気はうなぎのぼりに。しかし、こんな状態になれば、エドワードとベン・ジョンソンとの「密約」は一体どうなるの？

#### <ストーリーの軸その2－王位継承をめぐる権力闘争は?>

父王ヘンリー8世の遺志を継いでプロテstantとなつたエリザベス1世が、一時カトリック信者であった異母姉メアリー女王によってロンドン塔に幽閉されたことは、『エリザベス』や『エリザベス：ゴールデン・エイジ』では全く見えなかつたエリザベス1世の面白い一面だから、それは本作でじっくり味わつてもらいたい。それはともかく、今多くのロンドン市民の心を動かし始めたシェイクスピアの芝居は、エドワードが意図したように政治の動きにまで影響力を及ぼすの？そんな市民の動きに危機感をつのらせたセシルはこれを弾圧したが、これはあたかも現在の中国版ツイッター「微博」を武器として言論の自由、表現の自由を求める中国の市民たちと、これを押さえようとする中国共産党との対立と同じような構造だ。さあ、王位継承者をめぐる宮廷内におけるこの権力闘争は一体どうなるの？それが本作のもう一つのストーリーの軸だ。

また、本作の「ストーリーの軸その2－王位継承をめぐる権力闘争は？」についても、セシルの巧みな弁舌によってエリザベス1世はサウサンプトン伯ヘンリー・リズリーとエセックス伯ロバート・デヴルーをアイルランド遠征に送っていたが、セシルの策略に乗るかのように武装蜂起したサウサンプトン伯とエセックス伯は反逆罪で捕えられることに。そんな事態の中、自分の命も狙われたエドワードは最後の勝負をかけてエリザベス1世への謁見を実現させ、自身が身代りになる覚悟でサウサンプトン伯ヘンリー・リズリーの命を救うことに成功したが、そこでエリザベス1世がエドワードに約束させたのは、エドワードのすべての著作について未来永劫、彼の名を封印することだった。伯爵としての財政運営には何の能力も持たず、ただ戯曲やソネットを書き続けることに喜びを見出していたエドワードは晩年財産を失い、貧しい暮らしを余儀なくされたが、それでも彼は執筆を続けていた。そんな彼の作品を受領したのはベン・ジョンソン。そして、エドワードの作品集はすべてウィリアム・シェイクスピア作として上演され続けたため、シェイクスピアの名声はその後も全世界に広がり、多くの人々に記憶されたが、さてエドワードの方は？

本作が描く「もうひとりのシェイクスピア」というこの壮大な歴史秘話の結末は少しあざわらしさもあるが、エドワード本人はそれで満足していたのかもしれない。そんな複雑な一生を送ったエドワードを名優リス・エヴァンスが見事に演じている。他方、本作を観ればウィリアム・シェイクスピアという人物に対して少なからず反感を覚えるのは私一人だけではないだろうが、当のシェイクスピアの気持はどうだったのだろうか？本作を観終わった後も、そんな疑問や興味が次々と湧いてくるが、さて、あなたはこの壮大な歴史秘話の結末をどう受けとめる？

2013(平成25)年1月16日記